

大学共同利用機関の歴史と アーカイブズ 2008

総合研究大学院大学
葉山高等研究センター

大学共同利用機関の歴史とアーカイブズ
2008

葉山高等研究センター研究プロジェクト「人間と科学」

研究課題

「大学共同利用機関の成立に関する歴史資料の蒐集と
わが国における巨大科学の成立史に関する研究」

2008年度報告



総合研究大学院大学

平成21年3月

-
- ・ 本書は平成 21 年 2 月 5・6 日に自然科学研究機構
・ 東京連絡所にて開催されたプロジェクト全体会
「共同利用機関の歴史とアーカイブズ」の講演を
まとめたものです。
 - ・ 肩書き等は当時のものを使用しております。
-

はじめに

「人間と科学」プロジェクトの中の 「大学共同利用機関の歴史」

松岡 啓介（核融合科学研究所）

総研大・核融合科学専攻の松岡です。

この5年計画のプロジェクトは本年度で4年目を迎えました。来年度はプロジェクト最終年度ということですので、本日は、今年度の現状がどうなっているのかご紹介し、また、来年度の展望についても若干触れたいと思います。

ご出席の方々には、今日、明日のこれからのお話をお聞きになって、どういう風に進めていったらよるしいのかといったコメントをいただければと思います。

この課題は『人間と科学』というプロジェクトの中で、略称『大学共同利用機関の歴史』というものです。その中には4つのサブグループがあります：①資料データベースの構築、②オーラルヒストリー、③映像アーカイブズ、④これらを使った科学史・社会史的研究。基盤機関におけるデータにつきましては、各機関に応じたいろいろなかたちのデータが収集されているという印象を持っています。

はじめに

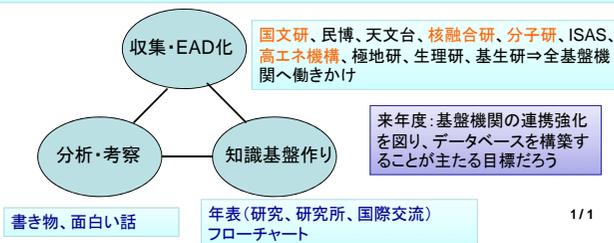
「人間と科学」プロジェクトの中の「大学共同利用機関の歴史」

サブグループ:①資料データベース、②OH、③映像、④科学史・社会史的研究、の今年度の状況と来年度の見通し(来年度は5年計画の最終年度)

収集(①資料、②OH、③映像)・資料目録データベースEAD化⇒(国際的にも)かなりのレベルでは?

総研大「科学と社会」のためのデータベース⇒基盤機関の間の連携⇒同種のデータベース他分野との連携⇒総研大アーカイブズの位置づけを確固たるものにした

「科学と社会」に関する研究(④)のための知識基盤作りと「科学と社会」の観点からの分析・考察⇒若手に(も)魅力ある活動として面白い発表や論文



紙の資料については、図中・橙色の機関、特に国文研が中心なのですが、国文研の資料情報共有化システムに高エネ機構、核融合研や分子研がのっかり、EAD という国際標準に準拠した資料データベースの公開に取り組んでいます。2年ほど前、KEK の関本さんや筑波技術大学の高岩さんらのグループとアメリカ西海岸を見る機会がありました。我々がすすめている EAD 化のデータベースが実現すると国際的にもかなりのレベルになるのではないかという印象を持っています。

核融合の分野では、3年ほど前、核融合アーカイブズの日米ワークショップをアメリカで行いました。その頃、我々も国際的に(アーカイブズを)どうかしなくてはならないといった意気込みでいました。アメリカではアーキビストの方々が立派な活動をされていますが、核融合の分野にかぎって言うと国際的な活動というのはほとんどやられていません。研究者自身もアーカイブズについては特にすすめようとは考えていない、といった状況です。核融合の分野は国際的にはそういった状況です。高エネルギーや他の分野ではまた違った状況にあると思います。

「人間と科学」プロジェクトの中の「大学共同利用機関の歴史」(松岡)

総研大の中の一プロジェクトとして、『科学と社会』といった観点からの研究に対し、このプロジェクトからどういったコントリビューションが出来るのかということを問われて答える際、『科学と社会』のための知識基盤としてのデータベースをきちんとつくらなくては行けないだろうと考えています。

例えば、いろいろな資料アーカイブズを行っているところは、研究所の歴史、研究所がどういったプロセスや議論を経てつくられたのかといった資料を集めているところもありますし、天文台はすばるの映像、極地研は南極の写真や資料収集といったことをやられています。相模原の ISAS ではロケットの打ち上げの映像などの資料を集められていますけれども、『科学と社会』といった観点からみた時、研究所がどのような議論を経て立ち上げられたのかといった議論をするための同種のデータベースや資料が今後必要となってくるだろうと考えています。

また、いくつかの機会に他の学会、化学会や建築学会、土木学会など、会員数が2、3万人もある大きな学会活動としてのアーカイブズがどうなっているのかといった話を聞く機会がありました。結論を言うと、どこも一緒でした。若い人が参加しない、場所やお金がない、という点が共通している話だと思い、安心しました。しかし、若い人がやらないということは問題です。

それから、図書館やレポジトリの世界では国立国会図書館を中心とした全国的ネットワークに基づいて連携されています。MLA 連携(ミュージアム・ライブラリ・アーカイブズの連携)も含めてネットワークが構築されていますので、そういったところに総研大のアーカイブズを位置付けることも、総研大アーカイブズの基盤をしっかりとせよといった意味で将来必要であると考えています。若い人が参加しないということは、結局、論文を書いたり学会発表につながるような題材がないと魅力がないという観点から、面白い発表をするあるいは論文を出す必要があると思います。『面白い話』と図に書いたことには意味があります。例えば、最近物理学会の物理学史のセッションで話を聞く機会

はじめに

があるのですけれども、聞いていると「いろいろ調べました」と言われるのですが、「それでどうなんだ」がいまいちつかめないのです。先週開催された総研大の研究会で、それについて問題提起をしたところ、東大・松本三和夫先生が、「要するに面白い話であればよいのです」という話をされました。面白い話というのは聞く人に感銘を与えるということで、我々自身も面白い発表、面白い論文、を心がけるべきだと思います。『科学と社会』の知識の基盤作りという点では、核融合では木村さんががんばって年表を作り、共同研究者の方々も国際交流を中心にした年表を作っています。本日出席されている北海道大学の田島さんは天文台関係の年表を国立天文台・野口さんと一緒につくっておられるということもあり、そういった面から考えますと同種のデータベースの構築は可能であると考えられます。

来年度に向けては同種のデータベース構築をターゲットに、基盤機関の連携強化を図ることがメインの目標になると思っております。この後、2月に10人足らずで民博を訪問する予定にしています。来年度は全基盤機関に連携をはたらきかけていきたいと思っています。

「人間と科学」プロジェクトの中の「大学共同利用機関の歴史」(松岡)

【質疑応答】

難波：このプロジェクトは『人間と科学』プロジェクトの中の一つの研究課題ですね？松岡先生がお話になった『科学と社会』とはどう言う関係なのですか？

松岡：私はほとんど一緒のものと考えております。平田先生のお考えは？

平田：はい、『科学と社会』というのは、総研大の基本方針として認められているものなのでして、来年度から本格的な取り組みが始まることになっています。これは教育を中心としたものですが、当然それに関わる研究というものが伴うわけであり、次の中長期計画の大きな柱となると思われています。高等研プロジェクトにはいろいろあるわけですが、『人間と科学』というのは基本的に『科学と社会』と重なると思います。むしろ『人間と科学』として扱っているところはまだ狭いです。『大学共同機関の歴史』もこれまでのところはスタンドアロンとして、重要な課題としてやってまいりましたが、今後は『科学と社会』といった大きな枠組みの中での位置付けを明確にし、可能であればその中の一プロジェクトとしてすすめていくべきではないかと思っています。現在、第1期の終わりに近いのですが、第1期は立ち上げということで、今後、継続的に活発なものとしてどうしていくのかということが、本日の研究会や来年度にかけて検討すべきことであると思います。『人間と科学』自体は課題の寄せ集めですが、『科学と社会』といった観点からは必要な課題を立ち上げていく必要があります。その時に『大学共同機関の歴史』というものはかなり重要な位置を占めるものであると思っています。なお、今年でこのプロジェクトは5年目です。1年目はまだプロジェクト形式の整っていない状態ではじまりました。最初の年に菅原理事が就任し、アーカイブズをやれ、やりますといった時期であり、公式なものではあったのですがプロジェクトとして成立する以前からありました。研究報告書もその年度の分から出しています（「共同利用機関の歴史とアーカイブズ2004」。今年度は5年目です。

はじめに

松岡：計画書には今年度は5年計画中の4年目となっていますね。

平田：『人間と科学』のプロジェクトとしては4年目ですがその前に1年、今は5年目です。



講演のようす

目次

はじめに	iii
松岡 啓介（核融合科学研究所） プロジェクト代表より 「人間と科学」プロジェクトの中の 「大学共同利用機関の歴史」	iii
第 I 部 1 日目（平成 21 年 2 月 5 日）	1
1. 本研究課題の成果報告	1
三原 喜久子（国立民族学博物館） 梅棹忠夫の著作物と著作目録	3
村上 政隆（生理学研究所） 生理学研究所点検連携資料室について	19
木村 克美（分子科学研究所） 分子研アーカイブズの現状	31
野口 邦男（国立天文台） 国立天文台すばる資料室 2008 年度の活動	43
神田 啓史（極地研究所） 板橋時代の国立極地研究所の映像記録について	53

佐藤 靖（政策研究大学院大学） ISAS アーカイブの現状	67
難波 忠清（核融合科学研究所） 核融合アーカイブ室 活動の現状	75
関本 美知子（KEK 史料室） KEK 史料室 平成 20 年度活動報告	89
第 II 部 2 日目（平成 21 年 2 月 6 日）	109
2. 特別講演	109
池内 了（総合研究大学院大学） 共同利用機関の前史としての日本学術会議の活動と今後	111
富田 良雄（京都大学） 蘇える科学技術史コンテンツ - CG 復元から見えてきたもの -	135
3. 大学共同利用機関の科学映像	159
平田 光司（総合研究大学院大学） オーラルヒストリーと映像 – 非文書史料	161
全体討論	181
Appendix	185
プログラム	187
参加者リスト	188

大学共同利用機関の歴史とアーカイブズ 2008

国立大学法人 総合研究大学院大学
葉山高等研究センター研究プロジェクト「人間と科学」
研究課題「大学共同利用機関の成立に関する歴史資料の蒐集と
わが国における巨大科学の成立史に関する研究」2008年度報告

総合研究大学院大学 葉山高等研究センター
〒240-0193 神奈川県三浦郡葉山町湘南国際村
電話：046-858-1500 ファックス：046-858-1541
The Graduate University for Advanced Studies (Sokendai)
Hayama Center for Advanced Studies (HCAS)
Shonan International Village, Hayama, Kanagawa 240-0193 JAPAN
phone: +81-46-858-1500 fax: +81-46-858-1541
URL: <http://www.soken.ac.jp/>
発行者：松岡啓介 (Keisuke MATSUOKA)
製作：BrainWorks (<http://www.brainworksjapan.com>)
発行日：2009年3月31日

- ・ 無断複写・転載禁止
- ・ 本書の内容は著者・発言者個人の見解を記録するものであり、その所属する団体の公式見解を表明するものではありません。
- ・ All rights reserved
- ・ ©2008 by the Graduate University for Advanced Studies